

紳士の装いに 受け継がれてきた ジュエリーという嗜み

文・中野香織

真の紳士は自らの装いの演出、またTPOに合わせて、ドレスアップの方法を心得ている。そこに欠かせない装いマナーとしての“ジュエリー使い”の重要性を服飾史家の中野香織さんに解説いただいた。



服飾史家
中野香織さん

株式会社Kaori Nakano
代表取締役。服飾史家として研究・講演を行うほか、企業の顧問教授も務める。新聞・雑誌・WEBなど多媒体で執筆。

近年のクラシックの演奏会では、トラディショナルな燕尾服を見ることのほうが少なくなった。指揮者のみならず、オペラ歌手も、それぞれ個性を生かしたフオーマルスーツのバリエーションを着こなしている。

最近の舞台で記憶に鮮やかなのは、バリトン歌手の与那城敬さんの装いである。黒いタキシードの下に黒いシャツ。全身、真っ黒なのだ。存在が華やかに光り輝いているのだ。秘密は、左の胸元につけられたピンブローチだった。2cmあるかないかの小さな存在だが、神々しいほどピュアな光を放ち、歌い手の顔を明るく引き立てるばかりでなく、舞台全体の輝度を上げていたのだ。舞台終了後、ご挨拶させていただいた与那城さんの胸元を間近に拝見したところ、ミキモトの真珠で作られた音符型のピンブローチだった。幕間の前後でポケットチーフの色だけを変えて「変身」を演出するスマートさも含め、舞台上立つ機会のない男性にとっても、大いに参考になる服装術の

ヒントがあると感じた。

舞台映えするピンブローチであれば派手なわけではないかと不安も生じるが、これが真珠のすばらしさで、間近で見ると、奥ゆかしい。品よい輝きでレフ版効果を発揮し、顔を明るく見せてくれる。ダイヤモンドは石そのものがまばゆく輝くけれど、真珠はそれをつけた人を輝かせる。宝石であれば服であれ、いかに高価であろうとそれを身につける男よりも目立ってしまえば男の価値はその分、安っぽく見える。でも真珠であればその心配はない。真珠がたたえる静かな光は、自らを主張しすぎることなくそれをつける人を照らし出す。遠目であれその威力が絶大なることは、与那城さんの舞台が実証済み。

真珠は古くから権力や地位の象徴として性別を問わず愛されてきた。ローマ皇帝ネロ、イギリスの銀行家ヘンリー・フィリップ・ホープ、インドのマハラジャなど、真珠を愛した男性は少なくない。戦前の日本の紳士も、真珠をあしらったタイピンで胸元を飾っていた。

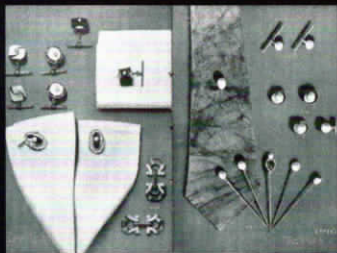
タイピン、タイバーなど、真珠があしらわれた男性用のジュエリーのなかでも、とりわけ現代の男性にはピンブローチをお勧めしたいのだが、その理由は3つある。

まず、ネクタイをつけられない装い方も増えた現代、ネクタイをつけずともピンブローチをあしらうだけで、ドレスアップ感を演出することができると。タイレスの抜け感を出しながらドレスアップするには真珠のピンブローチが最強なのである。次に、性別を問わないのでパートナーと共用できるだけでなく、帽子やマフラーにもあしらうことができ、バリエーション豊かに使えること。頻繁につけ替えることによる紛失の危険のみ注意されたい。そして最後に、自分のアイデンティティと関わるモチーフを選べば、コミュニケーションのきっかけになること。音楽関係者なら音符やギター、イラストを仕事にする人ならパレット、バイク乗りならバイクというように。日本人は顔をまじまじと見つめて話すことをあまり好まない。視線を少しずらし

た胸元の、たとえばカメヤタツノオトシゴなんかのひょうきんなピンブローチが目に残れば、女性から話しかけるきっかけも作りやすかったりする。

グローバルに愛好されるジュエリーとはいえ、とりわけ日本の紳士に真珠が似つかわしく思えるのは、養殖真珠を世界に普及させることに貢献したのが、不屈の魂をもつひとりの楽天的な日本男児だったからである。その人こそ、御木本幸吉。次々に襲い来る災難や障害や国際的なバッシングをその都度、くじけずに乗り越え続け、日本を代表するラグジュアリーブランド、「ミキモト」の礎を築いた。自らの発明品で世界へ進出する夢と決意をもった幸吉が、明治天皇に拝謁したときのことばは「世界中の女性の首を真珠でしめてもらいたいのです」。この大言壮語、有言実行の行動力に見られる豪気と快活さこそ、今の日本の紳士が取り戻したい精神ではないかと思う。

日本の宝石の代表格が、それぞれの紳士に似つかわしい形で胸元に飾られていけば、楽しい会話を始められる気がする。会話が続くかどうかは、また別の問題ですが。



ミキモトが発行していたカタログ「真珠」の昭和11年のもの。カフスやピンブローチなど、男性向けのジュエリーにも力を入れてきたことが伝わる。